



巻頭言

流れ学の研究から見た感想

植松時雄*

1. 流れ学の研究に頭を突込んでから、約半世紀になりますが、この間に感じたことと、それに関連して、本協会に望むことを記してみましよう。但し、私の狭い範囲の経験からながめてのことですから、当を得ない点もあるかと懸念しております。

2. NHK出版（海外取材班著）の“水と文明”を読み、砂漠の中のオアシスに引かれて、先日、イラン、トルコ、エジプトを一回りして来ました。なる程、水の乏しい自然環境との血みどろの戦い、外敵から身を守る懸命の努力のあとを見ることが出来ました。この二つの目的を果すために、あらゆる人知を絞って技術が開発され、それが古代文明へとつながり、更にその蓄積が、西欧文化発展への貢献となったことを、かい間見ました。

ずっと前のことになりますが、流体の国際会議で、アメリカ、オーストラリア、その他の国へ出掛けたときも、上に述べたと同じことが、強く印象付けられました。

3. 工部大学校昔噺（東大、工学部、丁友会編）によると、明治初年大勢の外国人教師によって、工業技術が我が国に培われ、その後皆の努力によって、今日では我が国の工業製品は、世界各国へ押し寄せて、それぞれの国の企業を圧迫するようになりました。これに対して、リーダーズダイジェスト（昭和52年11月号）に、西ドイツからの提言“なぜたたかれる日本の輸出攻勢”の一文があり、その冒頭に“西欧のメーカーの作り出した製品をそっくりそのままねたためであり、……”とあります。

4. 我が国でも、この際、私たちの頭脳から出た、新しい設計による製品を諸外国へ送り出さなければならない時が来ました。

それには、上に述べた事柄から、私たちがほんとに困っている問題の解決に取り組む姿勢が必要です。

阪大の有力な研究陣を背景としている本協会は、会員企業が一刻も早くこの体制に取組めるよう、音頭を取って欲しいものです。

* 植松時雄 (Tokio UEMATSU), 大阪大学名誉教授, 工学博士, 機械工学
学校法人 帝塚山学園 学園長